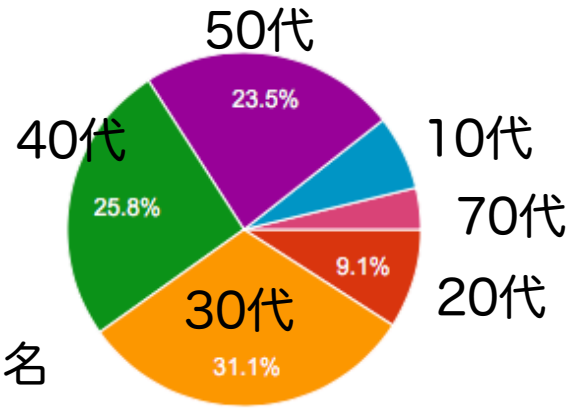
年会に関するアンケート結果

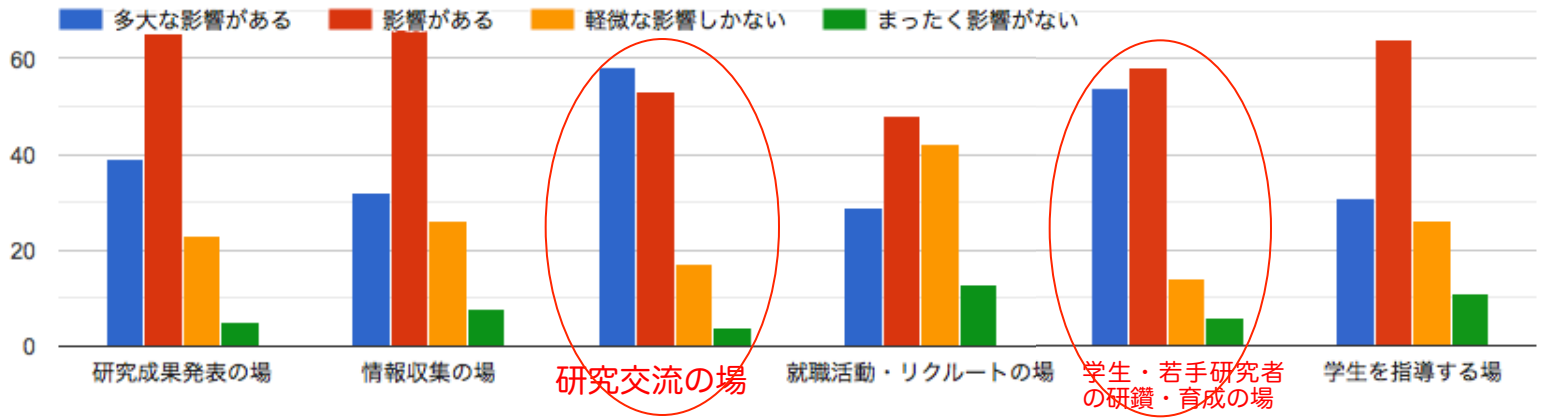
2020年6月実施



回答者132名

1. 現状と年会の意義

新型コロナ禍によって失われたもの



上記以外に失われたもの　（自由記載）

学術集会の新しい発想を触媒する役割も失われたのではないかと危惧しています

開催地の大学の研究環境を知る機会

企業との連携（共同研究を含む）推進の機会

横のつながり（学生同士の議論）

研究時間

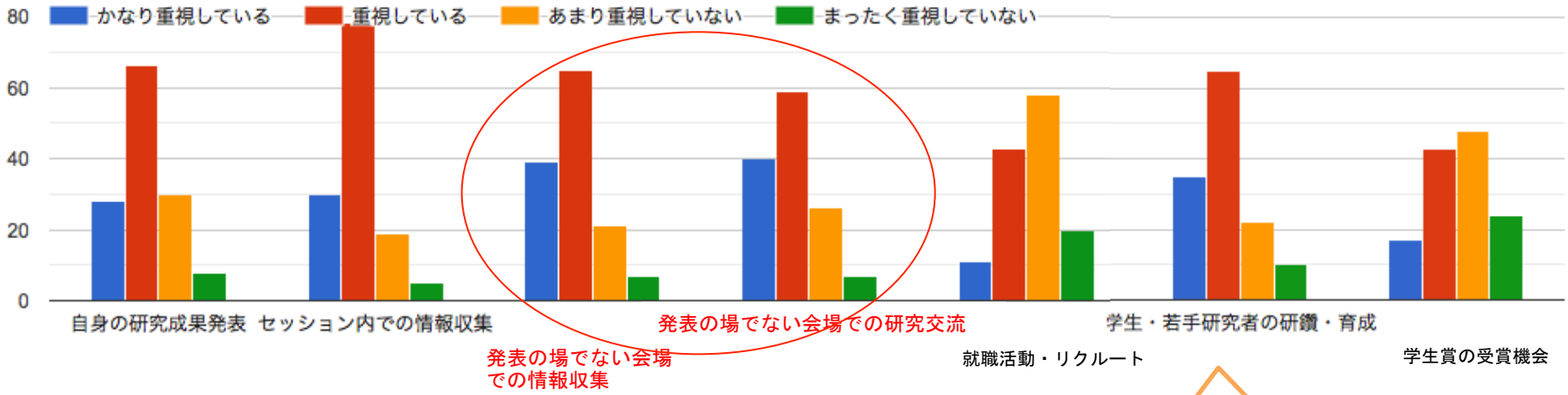
若手研究者が新しく同世代の若手や他の大学研究所の人と知り合い、刺激を受ける機会

・試料採集に県外に行きずらくなった（居住地岐阜、フィールド静岡、延期した）。
・韓国との共同研究（韓国の研究所で分析予定だった）が延期（中止？）となった

科研費の使用や、出張などの研究活動もストップして大変困っている。

ネットでは得られない展示企業による技術情報が貴重である

年会に重視すること



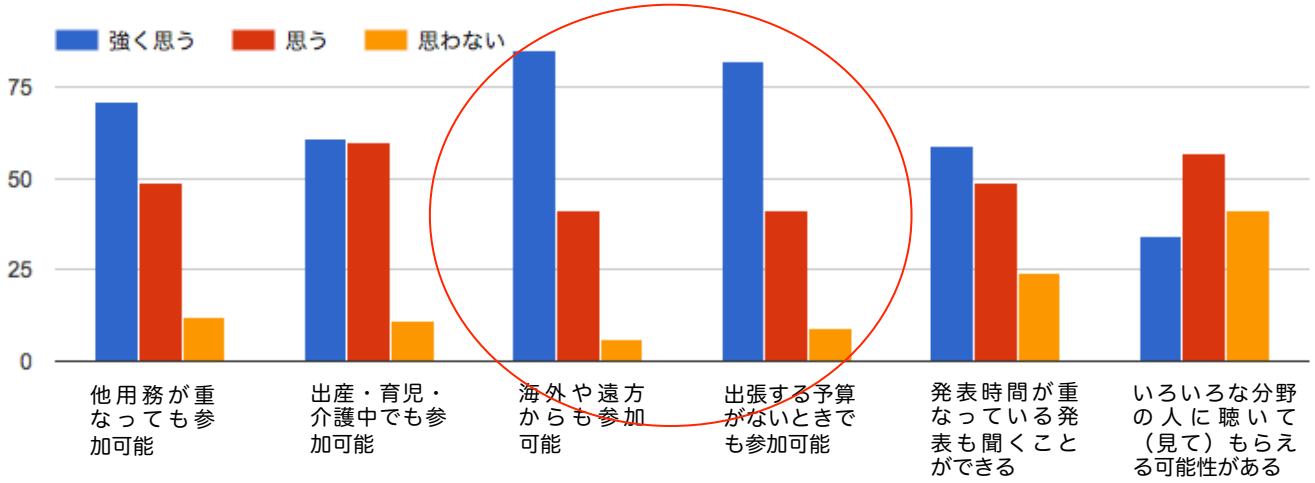
上記以外に重視するもの （自由記載）

- この分野の記憶に留めるべきことで、いまだ記録されていないことの発掘
- 若手研究者のアクティビティー
- 年会を目標にして頑張れる。
  年会開催地の研究を肌に感じられる。
- 顕彰事業とお祝い。
- 学会賞、奨励賞等の特別講演の内容
- 学生の成果発表

発表の場でない会場での情報取集や研究交流が重視されている

2. 2020オンライン年会開催について

メリット



上記以外のメリット　（自由記載）

移動時間が無いので効率的に参加ができる。その場で質問できなくてもチャット機能で質問し、回答を得ることができ、質疑応答はむしろ深まる場面に何度も遭遇した。

自分に関心のない講演をスキップできる

セッションに招待講演をお願いする時に、現地開催の場合、他分野の人にわざわざ遠方まで来てもらうことが難しい場合もあり、招待講演の候補が限られることがあります（特に地方開催の場合）。オンライン開催だと、他分野・遠方（場合によっては海外も）の人でもある程度気軽にお願いできるのは良いと思います。来年度以降に現地開催が復活する場合でも、一部はオンライン参加による発表も可能なやり方だと良いかもしれません（運営側は大変だと思いますが。。）。

発表の直後でなくても質問をしやすくなる。

すぐに答えられない質問にあとで回答することができる。

会場にかかるコスト、ごみの削減

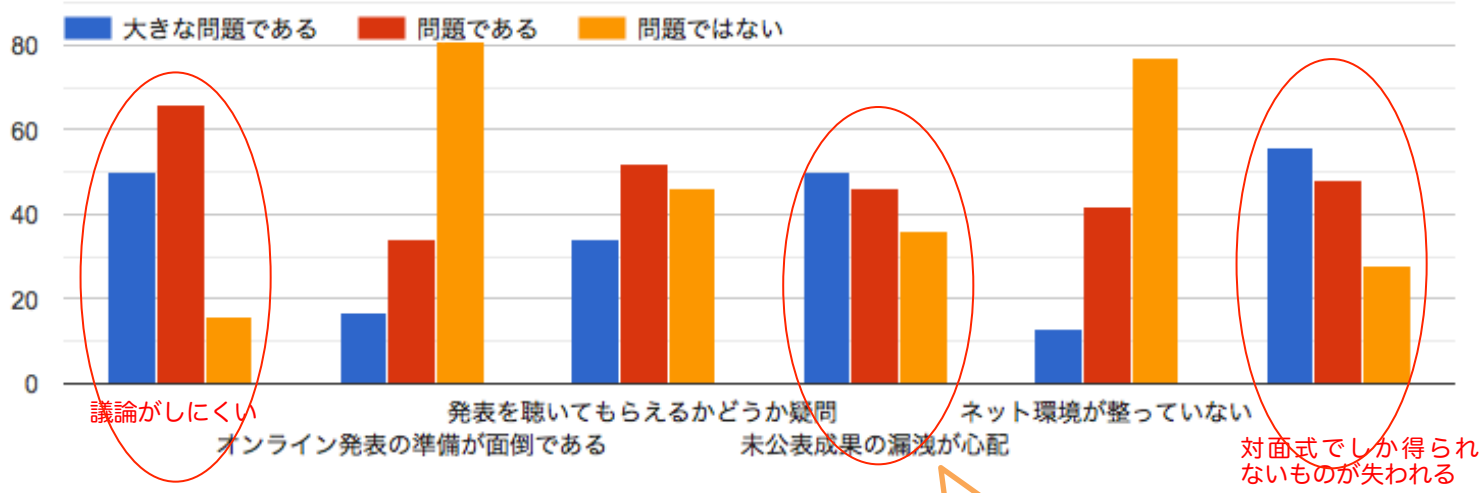
インターネット上は他学会との垣根がなくなる。差別化が難しいという一面もある。

興味のあるセッション・時間帯をピンポイントで聴講可能

コロナ感染予防のためにオンライン以外の選択肢がないから

費用の低減？

デメリット



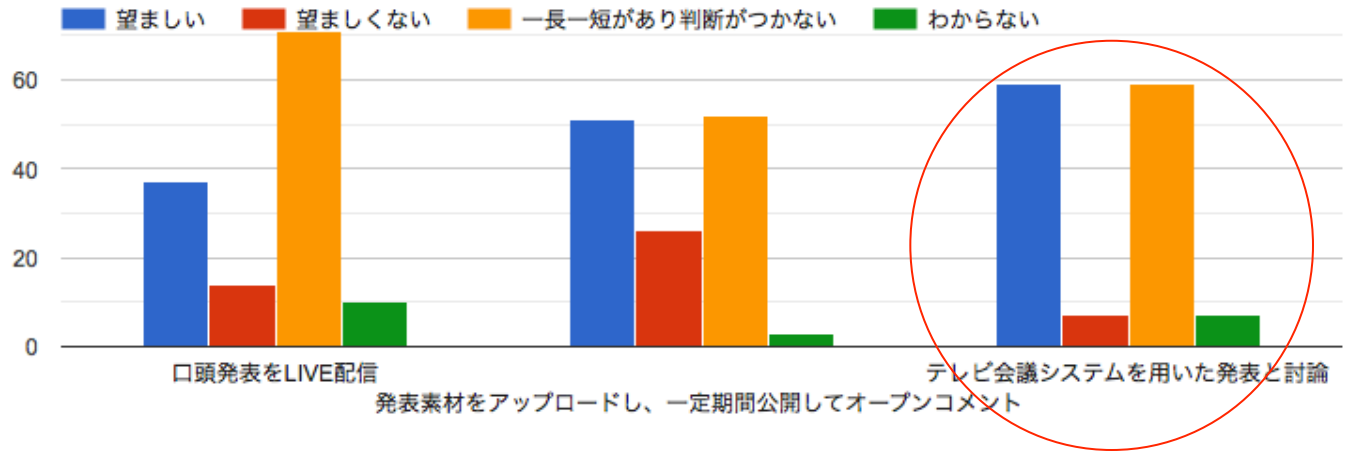
セキュリティ

対面式

上記以外のデメリット（自由記載）

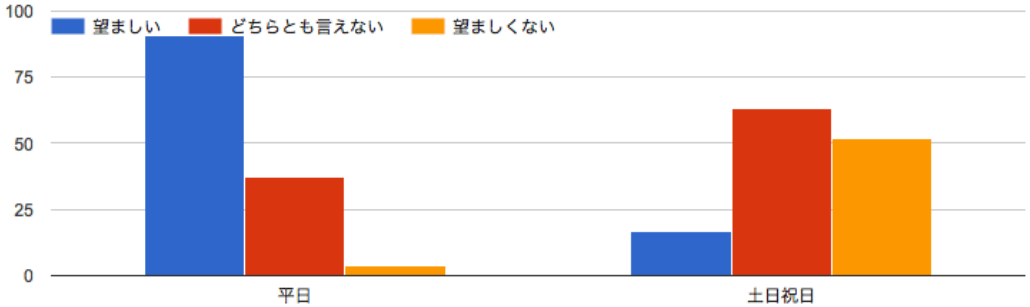
開催地の地域性という契機が発揮しにくい	
参加者も発表者も不慣れなので、通常の年会と比較して、どの程度の発表のクオリティーになるのか、どの程度の議論が展開できるか、よくわからない	
会場に居合わせた人同士の交流（雑談程度の会話からも形成される関係を含む）の場が失われる。発表者と質問者以外の人の情報を知る術がない。	
地元の料理などに接する機会。	偶発的な交流や議論はどうしても激減してしまう。また、コミュニティの既存メンバーの交流・情報交換はある程度できると思いますが、新たなメンバー（学生・若手）がコミュニティに参加していくプロセスが、オンラインでも実現できるかどうかが懸念されます。なので、今年まず1回、研究発表メインで開催するのは良いと思うのですが、何年も現地開催が難しい状況が続く場合は、コミュニティ縮小の問題が大きくなりうるので、交流に主眼を置いた何か仕掛けが要るようになると思われます。
学生発表賞などの審査ができない。	
目的の講演を探しに行かなければならず、思いがけない出会いがない。	公式な発表の場以外で、研究に関する会話などができないことは大きな問題だと考えます。
自分の発表に対して誰が興味を持ってくれたのかわかりにくい。	通常の学会よりも参加者が限られている可能性がある。（オンラインに抵抗がある人など）
慣れないシステムをブリーフィングする機会が十分に行われてから開催されるべき	開催地の振興、会場提供者・ケータリング業者などの収益が減る。会場が教育・研究機関だった場合、宣伝のチャンスが減る。
学会は予期しない出会いの場であるが，それが得られない．	古い考え方ですが，学会本会だけでなく懇親会の場で繋がる人や研究もときに重要です
発表内容に対する第三者同士での議論不足、予想外の発表を聞く機会の喪失	オンライン発表するくらいならはじめから論文として発表してもたいして変わらない。

オンラインの方法

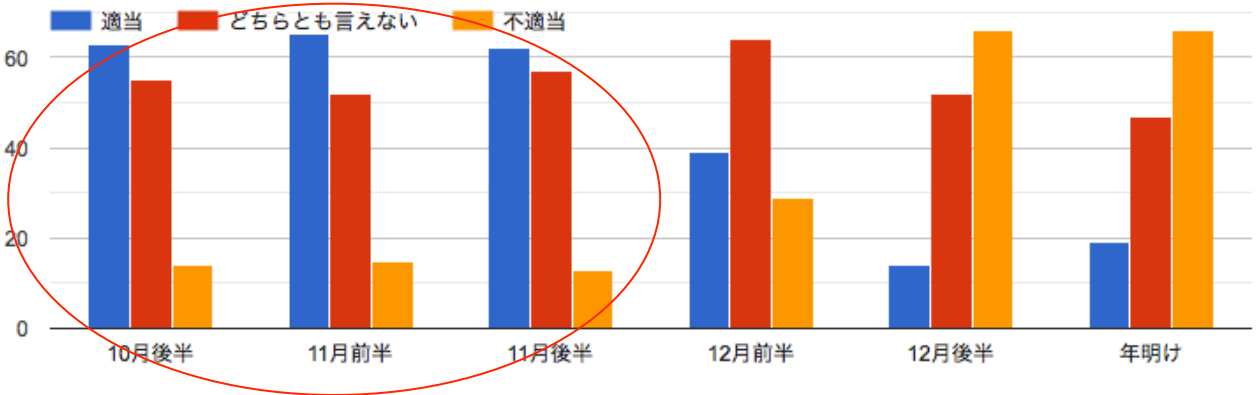


双方向

オンライン開催の時期



10月後半から11月後半



オンライン開催に関して寄せられた意見

リアルタイムでの交流（懇親会）も場の確保

年末年始、いいかも。暇やし。あと、3月も悪くない。

オンライン開催をする場合の方法について、発表素材をアップロードする方式でも口頭発表ができるようにしてほしい（パワポに音声や、発表動画といった形式）

研究グループ内でのセミナーや会議をオンライン会議システムでやっている人は多いと思います。地球化学会ぐらいの規模であれば、例えば各セッション参加者50人くらいなら、オンライン会議システムで普段の延長の感じでやれるのではと思いました。また、セッションコンビーナですが、平日開催だと調査等で参加が難しい場合もありえるので、土日祝の方が調整がしやすいです。また、有機地球化学会のオンライン発表会（主に学生による発表）も、九大の奈良岡さん（会長）が主導で、11月後半〜12月前半（11/28, 12/5, 12/12のどれか1日を検討中とのこと）に開催することを検討しているので、開催日が重ならないように調整いただけると助かります。

本来の開催予定日が良い

開催しなくてよい

オンライン開催決断には敬意を表しますが準備の大変さ等もあるので開催が良いのかどうかは判断が難しいと思います。特にe-posterなどはありかと思いますがオンラインでの口頭発表は準備側・運営側ともにそれなりの負担があるかと思います。

東大地惑では11月2週目の平日に博士課程の提出審査会が実施されるのが恒例

今年度は開催を見送る検討をしても良いと思います

発表形態によりけり

大学の授業期間中であれば、発表形式によっては平日での参加が難しいかもしれないです。出張扱いにならないので、授業をしなければなりません。

準備との兼ね合い、他学会との兼ね合い、学位論文日程との兼ね合い。年明けはさすがにおそすぎると思う、それならば3月開催の方が良い。

年度後半は入試，学生指導で立て込む．もし実施するならばなるべく早い時期が良い．予定通り９月で良いのではないか．

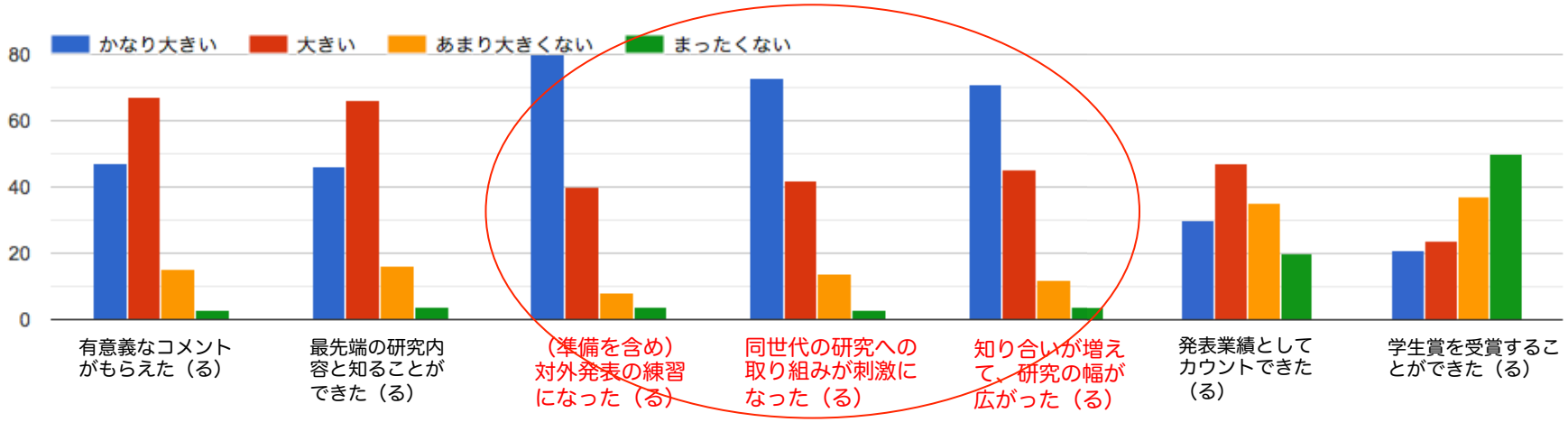
学生の研究活動が中止となっているため、学生の研究成果発表の場として従来よりも開始時期を遅らせるべきだと考えています。

今後、オンラインがデフォルトになる可能性はあるんでしょうか？

ライブ中継とその録画の並列

3. 学生の発表の場

年会で得られたこと



上記以外で得られたこと （自由記載）

新たな交流が生まれたこと。

私が学生当時学生賞は無かった。

多くの人に聞いてもらえた。発表の態度も参考になる。

学生の時は入会していませんでした。

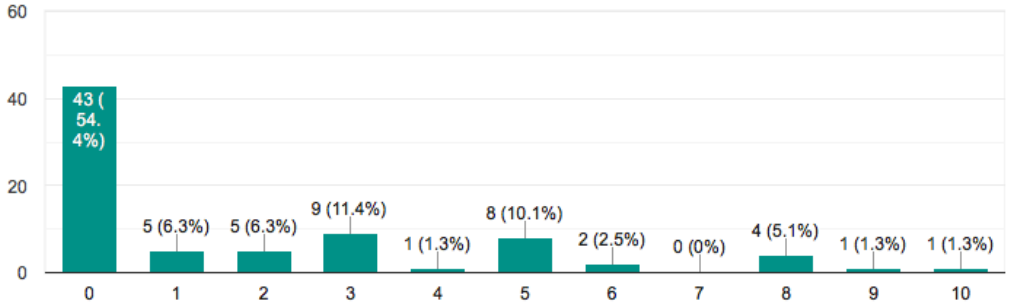
学位取得後の就職口に関するお話も紹介していただけました。

研究の目的をさらに明確にできる。

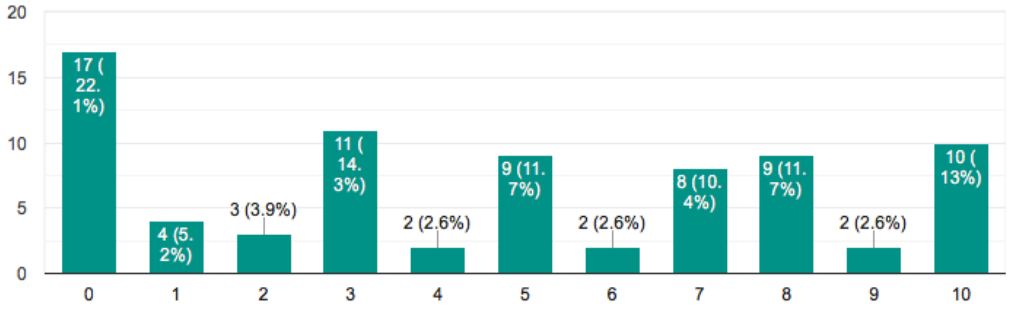
研究に関する自信と第三者からの意見

年会で発表している指導学生の割合

学部生

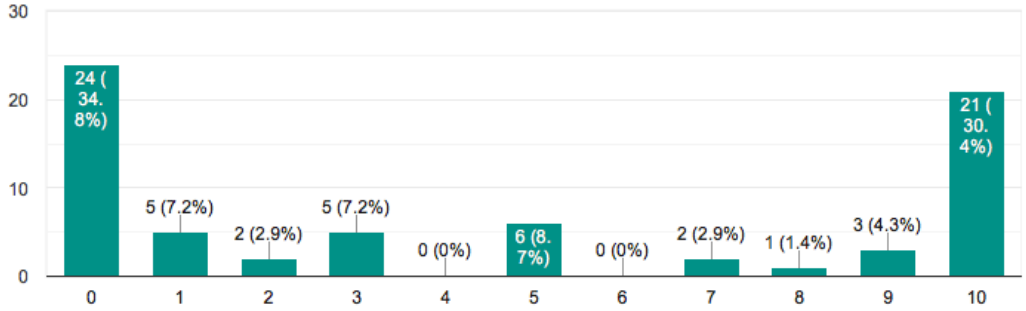


修士学生



高い発表率

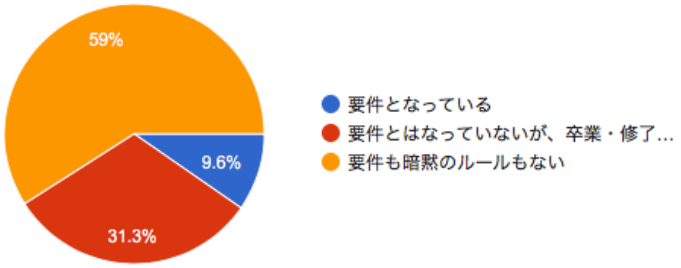
博士学生

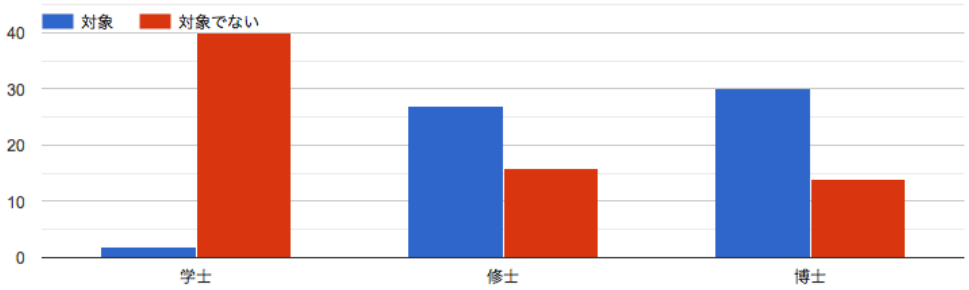


両極端な発表率

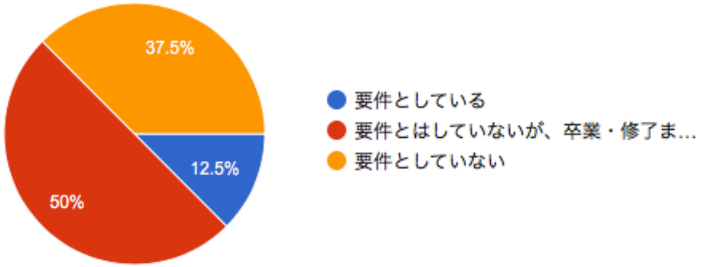
国内学会参加が学位取得の要件になっているか

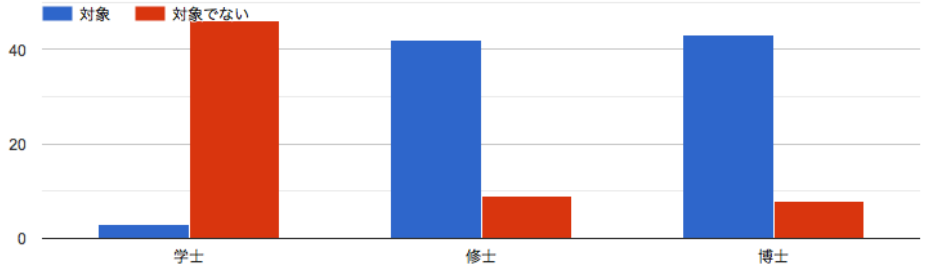
学科・専攻





自身（研究室）

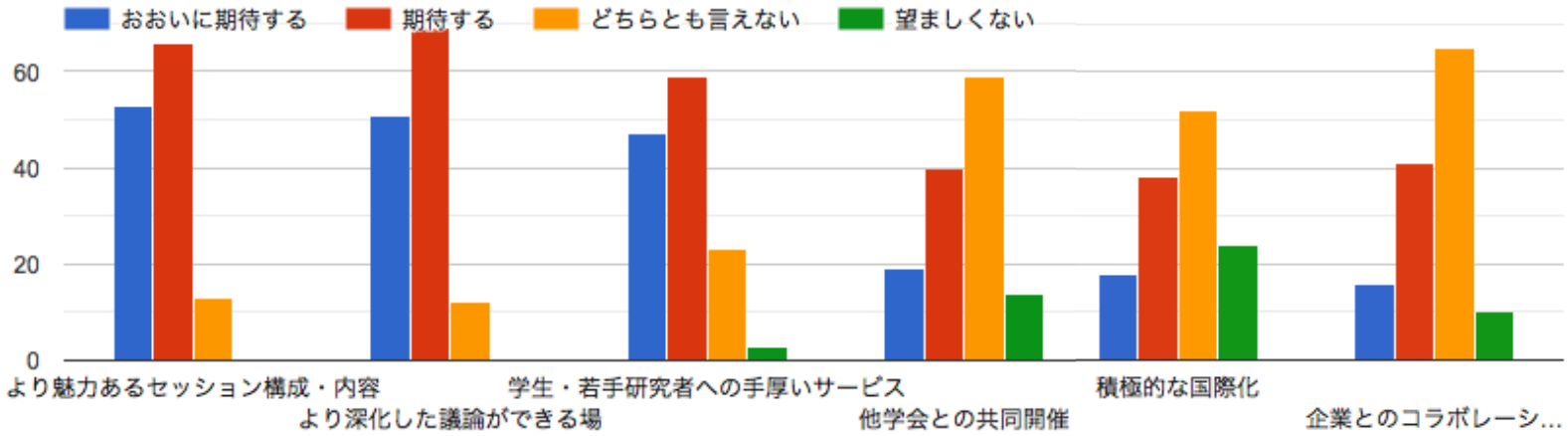




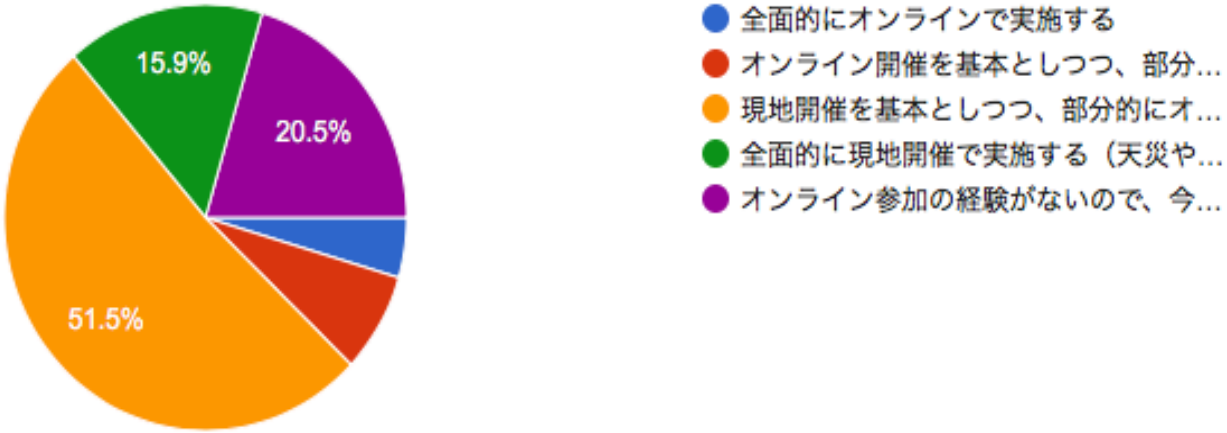
学科・専攻における要件はないが、研究室で国内学会参加を推奨している傾向が伺える

4. 年会全般について

年会に期待すること



年会におけるオンライン化について



寄せられた意見・要望・提案

会費に見合う事業の過半は、face-tofaceベースであることが会員からは期待されている

実際に参加することで得られることが多いため、感染症終息後は現地開催を希望する。

成功させましょう。旅行の楽しみは減るが、効率を考えたら、オンラインが良い。ただし、若者は同じ興味を持つ同世代と知り合えないね。どうする？

各地で開催することは、現地の人にとっても宿泊や食事をされるメリットがあり、期待していると思います。発表はアイコンタクトや間など、対面の要素を含めてこその発表だと思います。オンラインでの中継としてもいいかもしれませんが、基本的には会場での発表が意義深いと思います。何より、オンラインだと通信が途中で切れる心配が、発表者聴衆相互に無駄な心理的不安を与えます。

全面的にオンラインで開催できる基盤を構築する年度として、新しい形式に全力で挑戦してほしい。

現地開催がないと、直接他の研究者と話す機会が減るため、特に若い研究者や学生への影響が大きいものと思います。

今後の学会の在り方はいろいろ検討や実証を重ねて変わっていく可能性が高いのだと思います。直接対面での議論は非常に大事とは思いますが、おっぷで事情により現地に行けなくとも情報を得たり議論に加われる形態も非常にありがたいと思います。

毎日オンライン会議でうんざりしています．対面会議にくらべて同じことをやりとりするのに２倍近くの時間がかかるように思います．学会をオンラインで実施されると参加意欲がなくなります．

データ保護等で解決すべき問題があるとは思いますが、今後も現地＆オンライン同時開催も視野に入れていただけるととてもありがたいです。理由：家庭や仕事上の都合で聞きたくても聞けない発表がこれまでにもありました。また、発表できる段階ではない学生は現地開催に参加しづらく、本物の研究発表に触れる機会が得にくい状況です。一部でもオンライン開催があると、学生が参加（視聴）できる機会が格段に上がり、現役の研究者の発表から得られるものが多いと期待しています。

先の質問で、現地開催を基本としつつ、部分的にオンライン開催も実施する、としましたが、現地スタッフの負担が増えないように考慮されるべきと考えます。

不確定要素が数多くある中で、将来の年会の詳細を詰めることは極めてストレスフルな作業ではないかとお察しいたします。多くの学会員はこの現状を理解する方だと思いますので、LOCの決定に同意する方がほとんどではないかと考えます。執行部には、マネジメントよりも強いリーダーシップを期待しています。

今後、海外の研究者や出張しづらい研究者（育児・出産・介護、大学の業務等で出張が難しいなど）のために、通常からオンライン（もしくは録画ファイル等）で参加できるようになると望ましいと思う。研究室と中継でつないで、研究設備をライブで紹介したり、自由な場所でプレゼンできるようになると、より多様な深い議論ができるようになると思う。若手向けのセミナーとしてもいいかもしれません。

オンライン開催については、開催後再度のアンケートなどが必須

学生や若手のためのオフラインの会合はあると良いと思う。

JpGUが５月なので、年会の時期を少し遅くしてほしい。

オンライン開催によって、地域的・分野的バリアーがなくなり現存の学会の多くは淘汰されると思います。地球化学会がなくならないためには、早急に魅力的なオンライン開催を示す必要があります。

オンライン基調で、一部現地開催では旅費を支給しない組織が出るのではないか

アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。
お寄せいただいた貴重なご意見を真摯に受け止め、よりよい学会・年会になるよう、努力していきたいと思います。